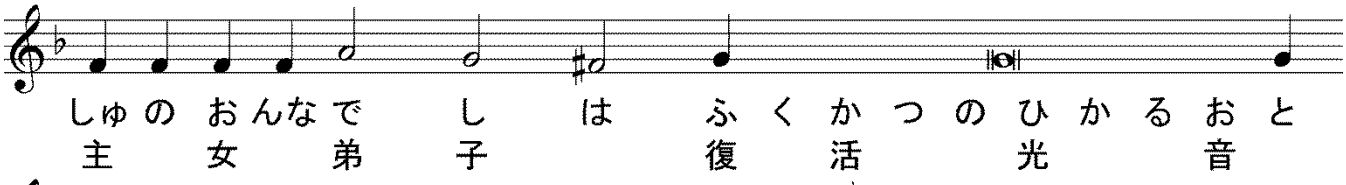
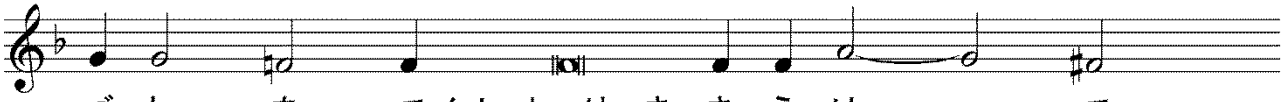
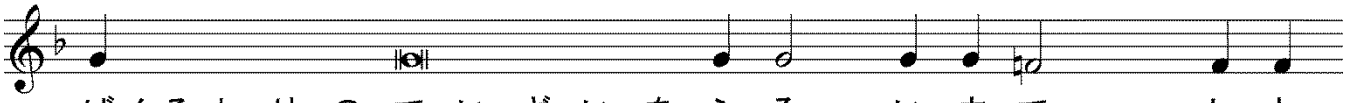
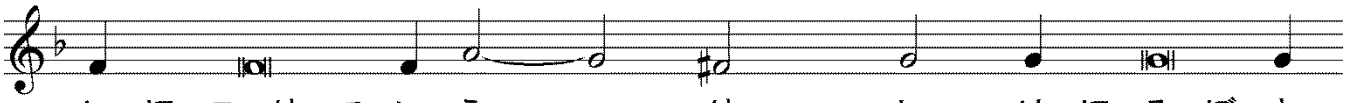
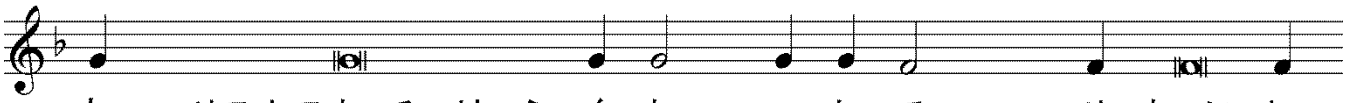
【　復活讃詞　第４調　】

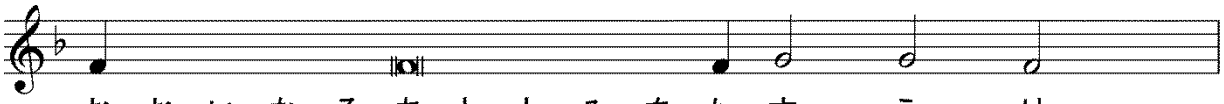




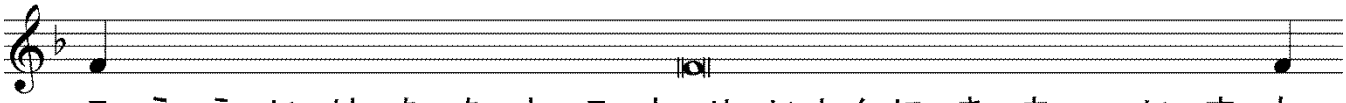


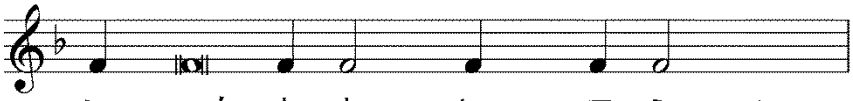


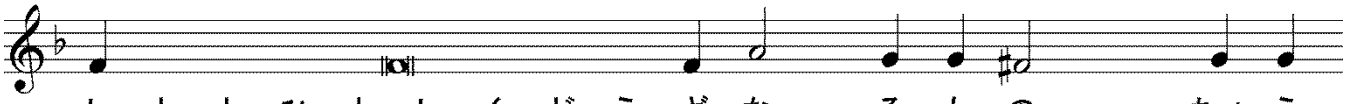


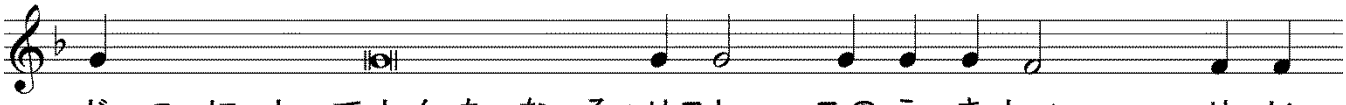


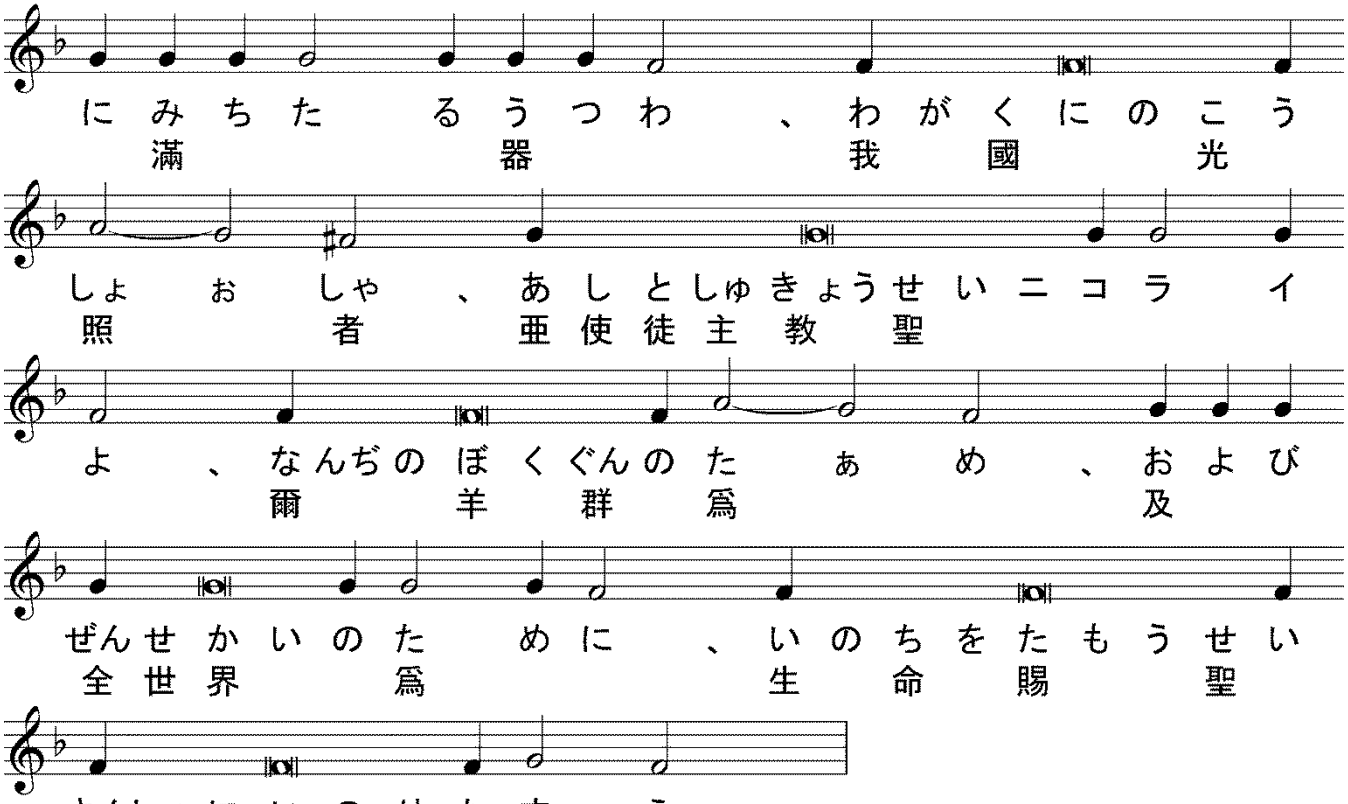
【　日本の亜使徒ニコライの讃詞　第４調　】





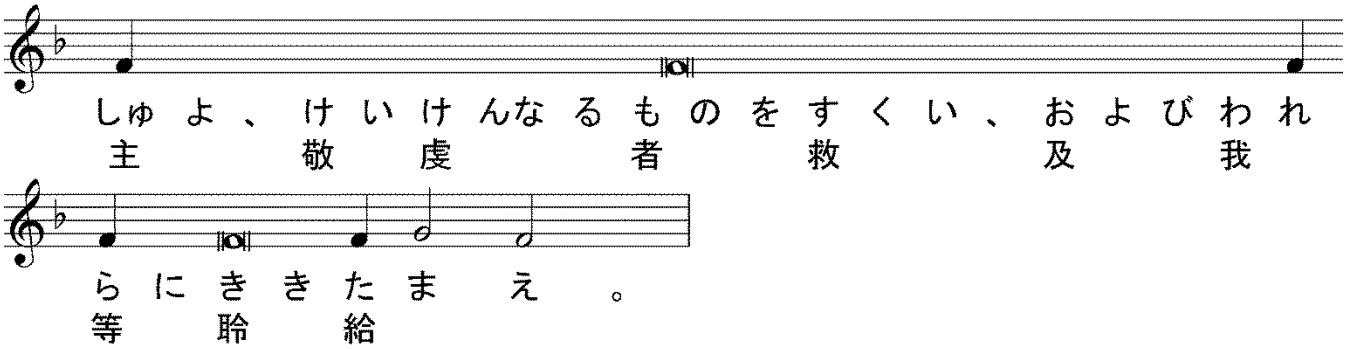




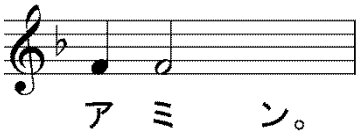


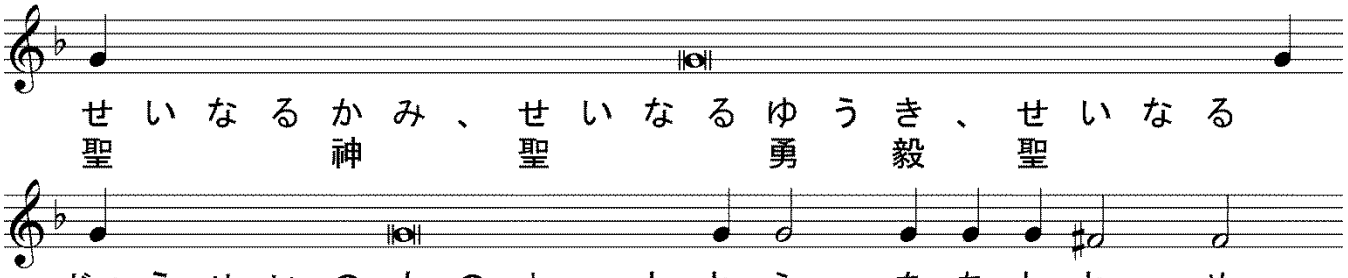
【　聖三の歌　】

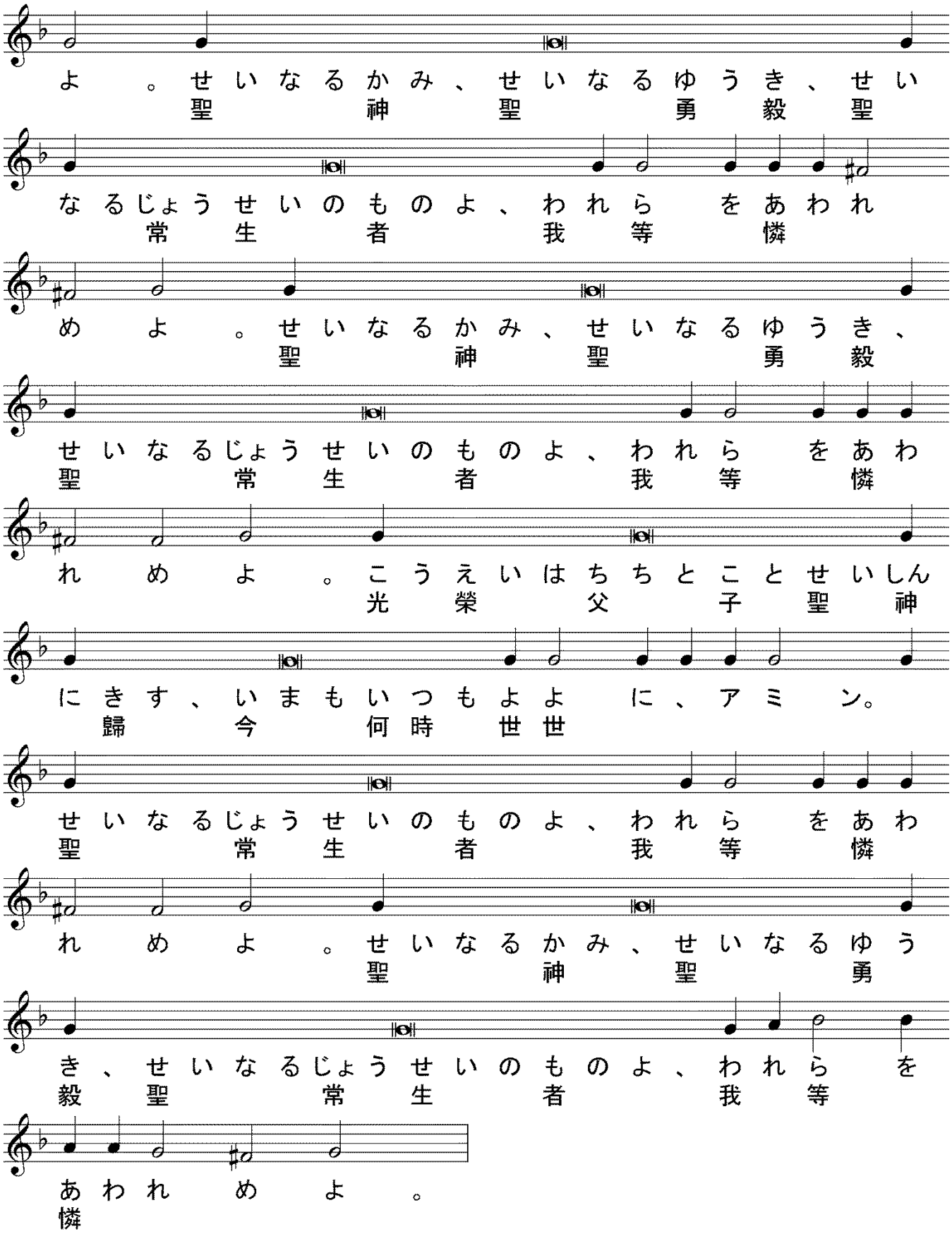
代禱）主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、



代禱）世世に、







【　提綱（プロキメン）主日第４調　】

代禱）睿智（えいち）、

誦經）プロキメン、主（しゅ）よ、爾（なんぢ）の工業（しわざ）は何（なん）ぞ多（おお）き、皆智慧（みなちえ）を以（もつ）て作（つく）れり、

誦經）我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

誦經）主よ、爾の工業は何ぞ多き、

【　使徒經（アポストロス）103 端　ロマ書 10 章 1 節～10 節　】

代禱）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがロマ人に達する書の讀、

代禱）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、我がイズライリの爲に心に願う所と神に禱る所とは、其救を得るに在り。蓋我彼等の爲に證を作す、彼等は神に於ける熱心あり、然れども知識に循うに非ず。蓋彼等は神の義を識らず、己の義を立てんことを圖りて、神の義に服せざりき。蓋律法の終はハリストスなり、凡の信ずる者義とせらるるを致す。モイセイは律法に由る義を指して録せり、之を行いし人は之に由りて生きんと。然れども信に由る義は斯く云く、爾の心に言う勿れ、孰か天に升らん、即ハリストスを降さん爲なり、或は孰か淵に下らん、即ハリストスを死より上せん爲なり。然るに書は何をか言う、言は爾に近し、爾の口に在り、爾の心に在りと、是れ即信の言、我等が傳うる

所の者なり。蓋若し爾の口に主イイススを承け認め、爾の心に神が彼を死より復活せしめしことを信ぜば、則救われん。蓋人心を以て信じて義とせらるるを致し、口を以て承け認めて救わるるを致す。

＊＊

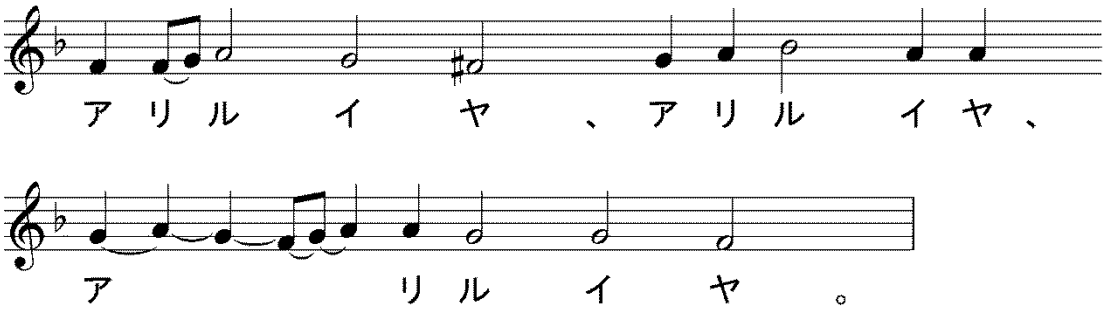
（比較用　口語訳）兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

＊＊

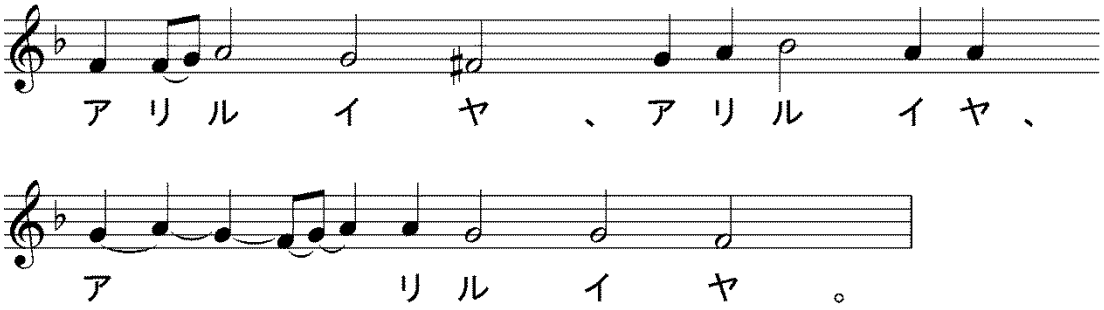
代禱）睿智、

誦經）アリルイヤ、

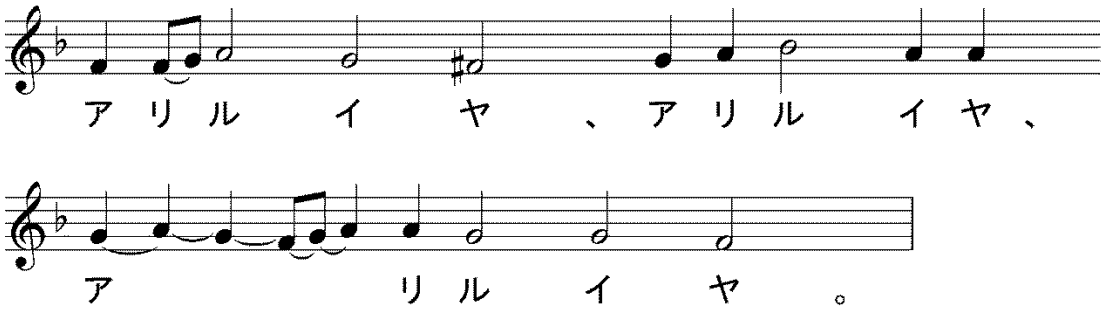
【　アリルイヤ　主日第４調　】



誦經）神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



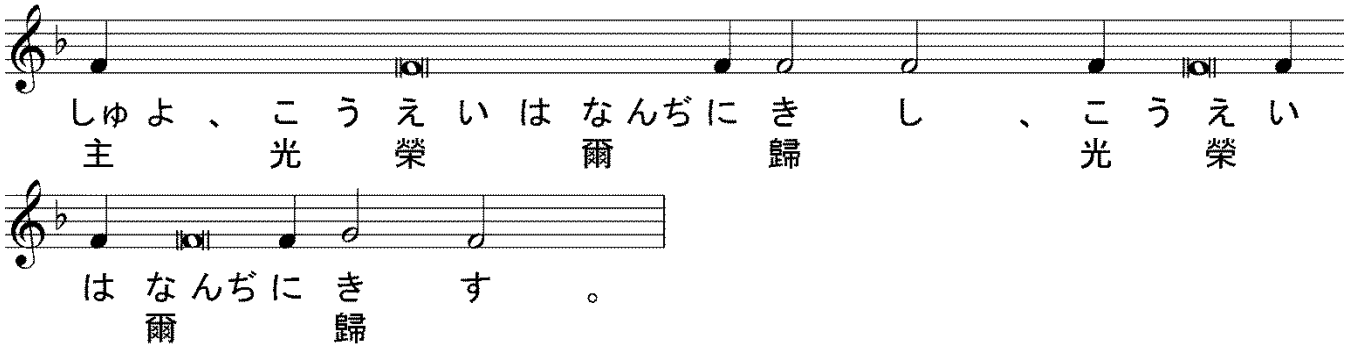
誦經）爾は義を愛し、不法を惡めり、



【　福音經（エヴァンゲリオン）　マトフェイ福音書28端　8章28～9章1節　】

代禱）睿智、

誦經）マトフェイ傳の聖福音經の讀、



代禱）謹みて聽くべし、

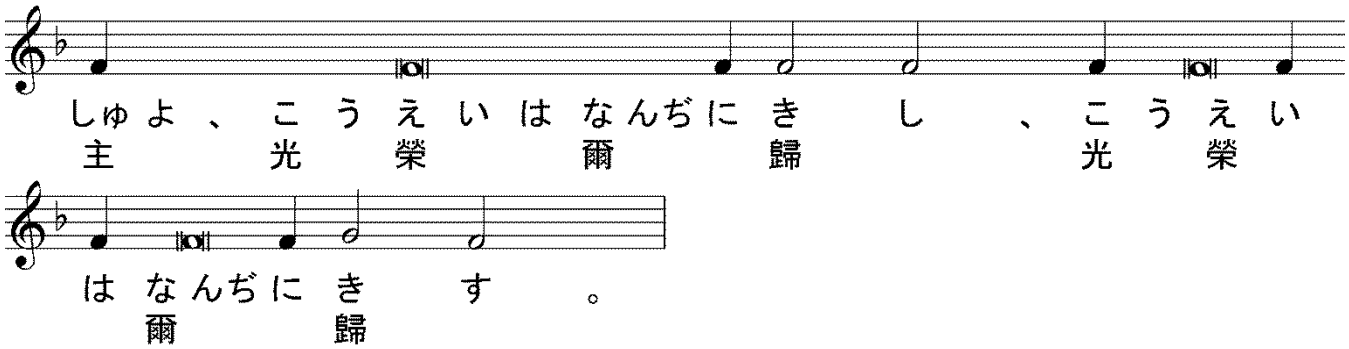
誦經）彼の時イイスス、ゲルゲシンの地に至りし時、魔鬼に憑らるる者二人墓より出でて、彼を迎う、甚猛し、人の敢て其路を過ぐるなきに至れり。視よ、彼等號びて曰えり、神の子イイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我等を苦めん爲に此に來りしか。此より遙に豕の大なる群は牧われたり。魔鬼彼に求めて曰えり、若し我等を逐い出さば、豕の群に入るを容せ。彼は之に謂えり、往け、魔鬼出でて豕の群に入りしに、視よ、豕の群悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。牧う者奔りて邑に入り、此等の事と魔鬼に憑らるる者の事とを告げたるに、視よ、邑擧りて出でて、イイススを迎え、彼を見て、其境を離れんことを請えり。彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスはガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、

がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。

＊＊



※代式祈祷③　へ